
学園新撰組！

黒鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園新撰組！

【Nコード】

N7918C

【作者名】

黒鷹

【あらすじ】

学園に蔓延る悪をただす、『誠部』に所属する男達の物語。

プロローグ

そこにはいた．．．．．本物の男が．．．．．！

私立雪之丘学園・誠部。

学園に蔓延る悪を正す男達の物語だ。

そしてまた．．．．．新たな軌跡が生まれるのだ．．．．．

プロローグ（後書き）

いつも暗い話ばかり書いているので、コメディがきちんとかけているか不安ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

第1話 誠部はこんな奴ら

夕方、午後4時12分。

私立雪ノ丘高校、3階生徒指導室。

そこには、1つの部活動が存在していた。

『誠部』

生徒数の多いこの学園の平和を守る、正義の味方。

蔓延るを悪をコテンパン・・・否、滅するのが彼らの使命である。

そして今、生徒指導室には3人の男がいた。

「暇だなあ・・・」

ぼつりと呟いたのは、部長である、コンドウ イッサ近藤壱叉（3年）である。

体は大きく、割とガタイがいいほうで、運動部からの誘いは少ない。

髪は、本人いわく「かつこよく決まっている」が、実際は結構ぼさぼさであった。

「女の子とデートしたい・・・」

そして、相当な女好きだ。が、一向にモテない。

というのも、壱叉はあまり頭が冴えるほうではないからだろう。

「女の何処がいいんだよ。何か、ムニムニしてて気持ち悪いだろ？」

腰に響くような美声を響かせたのは、ヒジカタ トシユミ副部長・土方歳弓（3年）だ。

すらつとした物腰、きりつとした切れ長の瞳、長い手足。

壱又とは逆に、女子に猛烈にモテている。

だが、特別な趣向の持ち主である歳弓は、相手になどしなかった。頭のよさは部の随一で、副部長というより、参謀といったほうがよほど似合っているだろう。

「さつきも女子、ふってましたよね。しかもお決まりのセリフではっさり。」

まだ声変わり途中な青年というより少年に近しいのは、部員・沖田^{オキタ}双刃^{ソウバ}（1年）。

顔はかなりの女顔で、男からの告白のほうがよく多かった。少しキレやすい性格がたたって、女みたい、の一言を聞くと、すでに我はなくなる。

気がついたときには相手は半殺し……否、4分の3殺しを実行した後だ。

「トシ〜……俺は、お前が羨ましいよ」

「壱又、俺はあんたが欲しい。」

「いやあのさ……？俺、そういう趣味……ないから……ね？」

「知ってる。」

歳弓の特別な趣向……それは、男が好きだということである。

「俺は女に興味はない。」

これが女子をふるお決まりのセリフだ。

最早校内で、歳弓の趣味を知らない人間はいない。

それでも万が一、と寄ってくるのが女子なのだ。仕方がない。

コンコン。

「どうぞー。」

待ちに待った仕事 came。

3人が3人、そろって同じ事を考えた。

「あのおゝ……。」

「何だお前かあ。」

「ほんと、気抜けちゃいますよ。」

「俺としては大歓迎だけだな。」

落胆する声（一名を除いては）を聞き、扉の前の男は苦笑した。
その後ろにもどうやら、もう一人いるらしい。

この二人は、この誠部の部員。

扉の前の男は山崎豊2年。
ヤマザキ ノボル

もう独りは、島田山太同じく2年。
シマダ サンタ

2人は誠部の中でも、特別・噂調査部隊といわれ、噂の真偽を調査する役目についている。

「で？何か目ぼしいものはあったか？」

「いえ、ないですね。いいじゃないですか、平和で。」

歳弓の問いに、豊が答える。

そして豊と山太は、部屋に入り、静かに戸を閉めた。

「そんなことしてると、平和ボケしちゃうつて。」

「おいおい、沖田。仮にも先輩なんだから敬語仕え？け・い・こ！」
「嫌ですよ、こんなのに使うの。」

「こんなの！？こんなのってどういうことだよ！？おいっ！」

双刃は常に、壱又の言う事だけは聞く。

というのも、もともと壱又、歳弓、双刃は同じ剣道場に通っていたのがそもそのきっかけなのだ。

小学校、中学校と同じ学校を経て、今に至る。

「サントはいつも血の気多いなあ。脳出血するぞ？」

「近藤さん！そんなことで、自分は死にません！」

ちなみに、血の気が多いほうが山太である。

そして、投げやりなほうが豊。

騒ぐ一同。

そんな時、扉のノックがもう一度、なった。

第2話 何でも屋とは微妙に違う

一同は、ぐつと息をのんだ。

というのも、この誠部を頼りにするものはほとんどなく、廃部寸前なところがあるからである。

豊でも、山太でもないとするれば……

期待が高まった。

・・・ガチャ。

「ごつめくん、櫛なくしちゃったんだけど、探してくんない？・・・
・・・って、どしたの？まつじめそうな顔しちゃってさ？」

苦笑しながらずっこける壱叉。

ため息をつく歳弓。

やっぱりか、と目を合わせる豊と山太。

「姉貴・・・何でも屋じゃないから。一応。」

「え？違うの？」

というのも、入ってきたのは双刃の姉・蜜^{ミツ}3年。

壱叉、歳弓とは幼なじみで、昔も今も潑刺とした女性だ。

くせつけのある腰まで届く長い髪は、後ろで一つに結んでいる。

学校一美人とも言われているようだ。

「櫛ぐらい、自分で探せばよかるう？」

「よかるうって・・・江戸時代じゃないんだからさ……………」

「でもさ、みつちゃん。櫛なんて、落とすところ決まってるようなもんだろ？なんでまた？」

歳弓は別として、壱叉に言われたのが初めてだった蜜は、少し驚いたようで目を丸くした。

だつてえ、と拗ねるように俯いて、片足を右へ左へ動かしている。

「私も、一通り探したのよ？家は朝見てきてなかったし、学校の中も探した。落し物にも届いてないみたいだし……」

「ほんとに探したのかよ……」

「本当よ！っていうか、姉のこと信じなさいよ！」

「はあ……へいへい。」

蜜は全く食い下がろうとしない。

ふう、と息をついてから、壱叉がよしつ、と気合をいれた。

「探すか！」

「ちょ、おい！壱叉！いいのか！？」

そんな何の得にもならない事をするのか、と憤慨する歳弓に、壱叉は笑いながら、肩に腕を回した。

「これも人助けだつて。千里の道も何とやら、だろ？」

「壱叉……」

歳弓が頬を桃色の染めながら、壱叉に顔を近づけると、それを壱叉はするりと抜け、蜜のところへ闊歩していった。
がくつとこけそうになる歳弓。

それを見て、クスクスと笑っている双刃。

「ほんとに！？ありがと、壱叉！」

「でも、みっちゃんもちゃんと探してな？」

「わかってるって。ありがとう。」

語尾にハートマークをつけるようにウインクをして、部屋を出て行った蜜。

「おえ。いい年こいて、よくやるよ。」

双刃は小さく呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7918c/>

学園新撰組！

2010年10月10日15時57分発行